

教育事業等報告書

令和元年度



独立行政法人 国立青少年教育振興機構

目 次

青少年教育に関する地域力向上等のためのモデル的事業の開発

- 〈看板事業〉 限界突破キャンプ 2
- 〈文部科学省委託事業〉 セルフディスカバリーキャンプ2019 4

グローバル人材の育成を見据えた国際交流の推進

- 〈文部科学省委託事業〉 日独青少年指導者セミナーA2 8
- ・イングリッシュアドベンチャー 10

青少年教育指導者等の養成及び資質の向上

- ・利用団体のための体験活動研修会 12
- ・ボランティア養成セミナー 16
- ・自然体験活動指導者（NEALリーダー）養成事業 18
- ・教員免許状更新講習（選択領域18時間） 20
- ・関東甲信越地区青少年教育施設協議会第13回職員研修会群馬大会 24

子供の貧困対策

- ・チャンスフォーオールチルドレン 宿泊キャンプ in 赤城 26
- ・チャンスフォーオールチルドレン 日帰りキャンプ in 赤城 29

青少年の体験活動等の重要性にかかる普及・啓発

- ・親子キャンプ 32
- 〈民間企業等連携事業〉 育パパ&育ママ応援ファミリーキャンプ 2019 34

地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

- ・赤城フェスタ2019（群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動実行委員会） 38
- ・群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動実行委員会出展ブース 40

「 限界突破キャンプ 」

1. 趣旨

7泊8日の遠征型キャンプで、登山・自炊などの活動を、仲間と共に、最後までやり抜くことを通して、何事にも自信を持って取り組める力を育む。

2. 事業の概要

(1) 期日 事前キャンプ 令和元年7月13日(土)～14日(日)(1泊2日)

本キャンプ 令和元年8月 3日(土)～10日(土)(7泊8日)

(2) 参加者 ①参加対象 小学校5、6年生 中学校1、2年生

②参加人数 23名(事前キャンプ24名、本キャンプ1名欠席) ※応募総数24名
群馬県前橋市11名、吉岡町4名、桐生市1名、みなかみ町1名、安中市1名、
栃木県栃木市1名、小山市1名、東京都杉並区2名、千葉県成田市1名

3. 企画運営のポイント

- ・上毛三山のうちの二山である赤城山(地藏岳・長七郎山・鈴ヶ岳・鍋割山・黒檜山・駒ヶ岳・荒山高原)と榛名山(掃部ヶ岳・榛名富士)の9つの山をチームで踏破する。

(総距離約40km、累積標高差約3,000m)

- ・基本的な生活習慣(早寝早起き朝ごはん)や挨拶、正しい言葉遣い、整理整頓などを重視し、あたりまえのことは、あたりまえにできることを徹底する。

- ・「プログラムデザイン」の工夫として、全体のねらい達成に向け、「ファースト」「セカンド」「サード」「ファイナル」の4ステージごとにねらいを設定し、活動のポイントやスタッフのかかわり方について明確にする。

- ・「ふりかえりの時間」の充実として、毎日の振り返りの中で、「挑戦・協力・発見」のキーワードに対して、自分自身がどうであったかということについて自己評価していく。また、相互評価として、「All for One(一人のために)」を取り入れ、自分の良いところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらう。

- ・ボランティアの事前研修(7/6-7)で、安全管理も含めた登山講義や実地踏査を実施する。

4. 日程

日程概要	プログラム	宿泊場所
7/13(土) 事前キャンプ1日目	参加者・保護者説明会、仲間作り、かんな箸作り、登山講義	国立赤城青少年交流の家
7/14(日) 事前キャンプ2日目	交流の家～赤城不動大滝散策～交流の家	
8/3(土) 1日目	開会式、仲間作り、チーム旗作り、野外炊事、登山講義	国立赤城青少年交流の家
8/4(日) 2日目	交流の家～鍋割山登山・荒山高原～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/5(月) 3日目	交流の家～掃部ヶ岳・榛名富士登山～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/6(火) 4日目	洗濯、野外炊事、フォトフレーム作り、テント設営	国立赤城青少年交流の家
8/7(水) 5日目	交流の家～鈴ヶ岳・地藏岳・長七郎山登山～赤城山分校	赤城山分校(テント泊)
8/8(木) 6日目	赤城山分校～黒檜山・駒ヶ岳登山～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/9(金) 7日目	キャンプのまとめ・発表、パーティー準備、お別れパーティー(野外炊事・キャンプファイヤー)	国立赤城青少年交流の家
8/10(土) 8日目	振り返り(アンケート等)、閉会式・決意表明	

5. 主な活動内容



鍋割山 1 3 3 2 m・荒山高原



掃部ヶ岳 1 4 4 9 m



榛名富士 1 3 9 1 m



鈴ヶ岳 1 5 6 4 m



地藏岳 1 6 7 4 m



長七郎山 1 5 7 9 m



黒檜山 1 8 2 8 m



駒ヶ岳 1 6 8 5 m

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足 20名 (87%) やや満足 3名 (13%) やや不満 0名 不満 0名

(2) 参加者の声

- ・ 1週間で9つの山を登ることができて、自分の自信へとつながりました。
- ・ チームの仲間やスタッフから、励ましの言葉や自分の長所などをたくさん褒めてくれました。
- ・ チームの仲間を助けたり役割を分担したりしながら協力して取り組むことの大切さを学びました。
- ・ どんなに辛いことでも仲間と共に乗り切り登った山は、いつも以上に感動がありました。
- ・ 普通に生活していたら出会えない人たちと一緒に過ごすことで、最高の思い出になりました。また、自分の良さに改めて気づくことができました。
- ・ このキャンプでは、忘れることのできない人生の宝物を得ることができました。
- ・ 限界突破キャンプに参加して、これから何事も前向きに挑戦していき、その経験全てを自分の力にしていきたいと思いました。

(3) 成果

- ・ 毎日、「挑戦・協力・発見」の振り返りを行ったことで、自分自身の目標について意識することができ、明日のめあてを考える手立てとなった。
- ・ 毎日、自分の良いところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらう「All for One (一人のために)」の振り返りを行ったことで、自己存在感や仲間のために役立っているという実感を得ることができた。
- ・ キャンプの様子を、取材協力していただいた群馬テレビのニュース番組で3回放映したり、その映像 (YouTube) を本所のホームページ上で配信したりすることで、参加者の保護者等に頑張っている活動の様子を届けることができた。
- ・ 23名全員が総距離約50km、累積標高差約3,000mの9つの山を登頂することができた。
- ・ メインプログラムである9つの山の登山に挑戦する中で、やり抜く力が高まる効果が見られた。

(4) 課題

- ・ 本事業で自己肯定感の教育効果量が上がらなかった理由としては、チームの人たちと力を合わせて事に当たるという野外炊事やテント泊等の協同場面が足りなかったのではないかと考える。
- ・ 自己肯定感を高めていくために、他者と協力する場面や自己と向き合う機会を増やすとともに、人の役に立つ、人から褒められる、感謝されるといった経験がたくさんできるような活動内容を検討し、それらの体験について毎日振り返り、次の活動に生かしていく必要がある。

担当 企画指導専門職 田村 文明

「セルフディスカバリーキャンプ」

1. 趣旨

ネット依存、又はネット依存傾向の青少年を対象に8泊9日、本年度メインキャンプに参加した青少年を対象に2泊3日、セルフディスカバリーキャンプに過年度で参加した青少年を対象に2泊3日の宿泊体験事業を実施し、モデルプログラムの開発進めるとともに、事業前後の参加者の変容について検証を行う。

この事業は国立青少年教育振興機構本部主催で、独立行政法人国立病院機構久里浜医療センターと連携し、国立赤城青少年交流の家を主幹として行っている。教育と医療の融合により、治療としてだけでなく、教育的観点も取り入れた体験活動プログラムを実施し、「ネット依存状態からの脱却のきっかけづくり」、「集団宿泊生活による、崩れた基本的習慣の回復」、「仲間と共に活動することによる、コミュニケーション能力の向上」を図る。

2. 事業の概要

(1) 期日

メイン	令和元年8月17日(土)～8月25日(日)(8泊9日)
フォローアップ	令和元年11月2日(土)～11月4日(月)(2泊3日)
セカンドフォローアップ	令和元年9月21日(土)～9月23日(月)(2泊3日)

(2) 参加者

①参加対象

メイン	ネット依存傾向のある中学生～大学生まで
フォローアップ	本年度メインキャンプ参加者
セカンドフォローアップ	過年度メインキャンプ参加者

②参加人数

メイン	男子16名
フォローアップ	男子10名
セカンドフォローアップ	男子16名

③参加者の内訳

メイン	13歳2名、14歳2名、15歳2名、16歳4名、 17歳2名、18歳1名、19歳2名、22歳1名
フォローアップ	13歳1名、14歳2名、15歳2名、16歳3名、 18歳1名、22歳1名
セカンドフォローアップ	15歳3名、16歳2名、17歳4名、18歳3名、 19歳1名、22歳2名、23歳1名

3. 企画運営のポイント

〈メインキャンプ〉

- ・キャンパーとメンターがいつでも語り合えるよう、一緒に歩いたり、ものづくりをしたりするプログラムを多く実施する。また、非日常的な生活を送ることができるよう、できるだけ体験したことがないような活動を多く取り入れる。

〈フォローアップキャンプ〉

- ・メインキャンプ後のそれぞれの様子などをゆっくりと語り合えるよう、プログラムにゆとりをもたせる。また、フリータイムを多く設定し、グループに関係なく、キャンパーとメンターが語り合えるようにする。メインの活動では、前回の登山よりも少し難易度の高い登山を行うことで、達成したときの感動を味わえるようにする。

〈セカンドフォローアップキャンプ〉

- ・キャンパーとメンターがいつでも語り合えるよう、野外炊事やウォークラリーなどのプログラムを多く実施し、体験したことがないような活動を多く取り入れる。
- ・久しぶりに会ったキャンパーやメンターの交流が図れるように、フリータイムや焚き火の会などの語らいの場ももてるようにする。

4. 日程

メインキャンプ

	午 前	午 後	夜
8月 17日 (土)		はじまりの会 オリエンテーション アイスブレイク ビジュアルオリエンテーリング 施設見学	認知行動療法
8月 18日 (日)	認知行動療法 オリエンテーリング	かな箸づくり ワークショップ	認知行動療法
8月 19日 (月)	認知行動療法 流しそうめん	フリータイム 野外炊事 (カレー作り)	認知行動療法
8月 20日 (火)	認知行動療法 あかぎアドベンチャープログラ ム	あかぎアドベンチャープログラ ム ネット依存学習	認知行動療法
8月 21日 (水)	認知行動療法 フリータイム	フリータイム	認知行動療法 キャンプの中間まとめ
8月 22日 (木)	認知行動療法 地藏岳登山	ネット依存学習 お切り込みうどん作り	認知行動療法
8月 23日 (金)	認知行動療法 魚釣り体験	買だし (オリジナル料理) ネット依存学習	オリジナル料理作り ワークショップ 認知行動療法
8月 24日 (土)	認知行動療法 フォトフレーム作り	キャンプのまとめ①	野外炊事 (BBQ) キャンプのまとめ②
8月 25日 (日)	片付け・清掃 おわりの会		

フォローアップキャンプ

	午 前	午 後	夜
11月 2日 (土)		はじまりの会 スライドショー視聴 アイスブレイク 認知行動療法	野外炊事 (豚汁作り) フリータイム
11月 3日 (日)	榛名富士登山	榛名富士登山 フリータイム	キャンドルファイヤー フリータイム
11月 4日 (月)	片付け・清掃 おわりの会		

セカンドフォローアップキャンプ

	午 前	午 後	夜
9月 21日 (土)		はじまりの会 思い出の会 アイスブレイク	野外炊事 (カレーライス) 認知行動療法
9月 22日 (日)	認知行動療法 ワークショップ	富士見ウォークラリー	野外炊事 (BBQパーティー) 焚き火の会
9月 23日 (月)	片付け・清掃 終わりの会		

5. 主な活動内容



「流しそうめん」



「地蔵岳登山」



「ネット依存学習」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

メイン	満足 9名 (64%)	やや満足 4名 (29%)	やや不満 0名	不満 1名 (7%)
フォローアップ	満足 10名 (100%)	やや満足 0名	やや不満 0名	不満 0名
セカンドフォローアップ	満足 11名 (73%)	やや満足 3名 (20%)	やや不満 0名	不満 1名 (7%)

(2) 参加者の声

〈メインキャンプ〉

- ・オリエンテーリングでは、草をかき分けて進みとても疲れた。全力で取り組み全てのポストを回ることができました。
- ・8泊9日はとても長かったです。
- ・野外炊事など貴重な体験ができ、オリジナル料理作りはとても楽しかったです。
- ・ワークショップでメンターの話聞いて何か変えないといけないと思いました。
- ・メンターといろいろな話をすることによって、心が和らぎました。
- ・アイスブレイクでは、8泊9日を一緒に過ごす仲間と情報交換ができました。
- ・あかぎアドベンチャープログラムでは、レクがとても楽しく、普段活動している場所でも使えると思いました。
- ・悩みを連日相談することで、自分の問題の根本に気付くことができました。また、新しい人生の目標を見つけることができました。
- ・流しそうめんは初めての体験で、メンターとも仲良くなれて良かったです。

〈フォローアップキャンプ〉

- ・気分がリフレッシュでき、メンターやキャンパーと再会して楽しかったです。
- ・山登りはきつかったけどいい運動になって楽しかったです。
- ・休める時間が多く、体力を保つことができました。
- ・みんなとコミュニケーションをとる機会がたくさんあったので良かったです。
- ・いい雰囲気です。非日常を満喫できました。

- ・フレンドリーな対応で、ぎすぎすせず楽しく過ごせました。
- ・山登りがきつかったです。時間も短いと思いました。

〈セカンドフォローアップキャンプ〉

- ・同じ代のキャンパー、メンターに再会できてよかったです。
- ・体を動かしたいと思って参加し、いろいろな人と楽しむことができました。
- ・2泊3日はあっという間だったが、とても楽しかったのでまた来たいです。
- ・話すのは苦手だが、いろいろな人と話をすることによって、心が和らぎました。
- ・メインキャンプから、みんながどんな過ごし方をしているのか気になっていたが、仲間と情報交換ができて良かったです。
- ・自分の立ち位置を確認したかったです。自身を見つめ直すことができました。
- ・とても疲れたが、このキャンプで得たものを次のステップに生かしたいです。

(3) 成果

〈メインキャンプ〉

- ・1日3食しっかり食べ、決められた時間に入浴、就寝を心がけることで、基本的な生活習慣の回復の第一歩になったキャンパーが多くいた。
- ・様々なプログラムを通して、自分自身を見つめ直し、自分なりの目標や決意をもつことができた。
- ・はじめはふさぎ込んでいたが、少しずつ心を開き、仲間とコミュニケーションをとることができるようになってきたキャンパーもいた。

〈フォローアップキャンプ〉

- ・キャンプのめあてを明文化し、プログラムの時間に余裕をもたせたことで、キャンパーもメンターもゆとりをもって活動することができた。
- ・フリータイムを多くとり、また、前回とは違うグループで活動したことで、キャンパーとメンターがたくさんの人とゆっくり話をすることができた。

〈セカンドフォローアップキャンプ〉

- ・基本的な生活習慣の回復の第一歩になったキャンパーが多くいた。
- ・様々なプログラムを通して、自分自身を見つめ直し、自分なりの目標や決意をもつことができた。
- ・メインキャンプのことをふり返り、仲間と再会することで、次の段階へのステップにしたいという気持ちをキャンパーがもつことができた。

(4) 課題

〈メインキャンプ〉

- ・日程的に時間に余裕のある日とスケジュールに追われる日があったので、次年度はゆとりもったスケジュールになるよう、プログラムの構成を工夫する。
- ・プログラムの中にフリータイムを多く入れることで、キャンパーとメンターがゆっくりと話せる時間を確保する。
- ・機構本部、久里浜医療センター、赤城青少年交流の家の3者の連携をさらに密にし、互いの役割を明確にする。

〈フォローアップキャンプ〉

- ・メインキャンプに引き続き、キャンパーよりもメンターの人数が多かった。次年度はメインキャンプ時に人数の調整をする必要がある。
- ・今回は離れた山に移動して登ったが、近場でできるプログラムを検討することも必要である。(バスの料金がかかるため)

〈セカンドフォローアップキャンプ〉

- ・同窓会的な側面があるため、もっと語らいの場を取ってよい。次回はゆとりのあるスケジュールで、キャンパーとメンターがゆっくりと話せる時間も確保する。
- ・機構本部、久里浜医療センター、赤城青少年交流の家の3者の連携をさらに密にし、互いの役割を明確にする。

メインキャンプ・フォローアップキャンプ担当 主任企画指導専門職 梁河 昌彦
セカンドフォローアップキャンプ担当 企画指導専門職 塩原 基寧

グローバル人材の育成を見据えた国際交流の推進事業〈文部科学省委託事業〉

「日独青少年指導者セミナーA2」

1. 趣旨

日本とドイツの青少年教育の現状や取り組みを理解し、両国の指導者が意見交換することを通して青少年指導者の資質や能力の向上を図る。

2. 事業の概要

(1) 期日

令和元年5月30日(木)～6月4日(火)(5泊6日)

(2) 参加者

①参加対象 ドイツ連邦共和国在住で、青少年教育行政、青少年団体等で指導にあたる専門家でドイツ政府・ドイツ側実施機関であるドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関・ベルリン日独センターにより選出された者。

②参加人数 11名

③参加者の内訳 ドイツ団員8名、団長1名、通訳1名、本部担当1名

④ホームステイ先 8家族(前橋市3家族、高崎市4家族、安中市1家族)

3. 企画運営のポイント

- ・A2団のテーマは「子どもと若者の貧困－課題と解決に向けた取り組み－」である。群馬県内の子どもの貧困について、県による施策や状況、課題等を総合的に理解できるようにするために、訪問先を設定する。また、東京プログラムを補完するような、地域での取り組みを中心とした訪問場所を設定する。
- ・日本文化体験の機会として、世界遺産の日光東照宮を見学先として設定する。

4. 日程

	午前	午後	夜
5月 30日 (木)	・東京～高崎到着	・児童養護施設 希望館訪問 ・群馬県庁子ども未来部子育て・青少年課訪問	・団ミーティング
5月 31日 (金)	・群馬県中央児童相談所訪問	・フリースペースアリスの広場訪問 ・ホームステイ開始	・ホームステイ
6月 1日 (土)	・終日ホームステイ		
6月 2日 (日)	・ホームステイ終了	・福豚の里とんとん広場(ざわざわ森)にてお別れパーティ ・国立赤城青少年交流の家の説明	・団ミーティング
6月 3日 (月)	・日光東照宮見学		・団ミーティング
6月 4日 (火)	・愛育乳児園訪問	・高崎駅発～東京	

5. 主な活動内容



「児童養護施設 希望館」



「群馬県子育て・青少年課」



「フリースペースアリスの広場」



「ホストファミリーとの懇親会」



「日光東照宮」



「愛育乳児園」

6. 成果と課題

(1) 参加者（ドイツ団員）の声

- ・日独の共通点として、育った家庭環境が将来に大きな影響を及ぼしていることが分かりました。貧困世帯の大半がひとり親家庭であることも分かりました。
- ・行政と民間支援団体が連携して課題に対処していることは日本とドイツの共通点であることが分かりました。
- ・社会福祉と青少年教育職の専門職の度合いが国によって違うことが分かりました。
- ・民間支援団体に交付される補助金制度がドイツと日本で大きく違っていることが分かりました。
- ・入所型支援施設では、ドイツでは兄妹で一緒の場所で過ごさせるのに対し、日本では男女を分離していて、考え方に違いがあることが分かりました。
- ・群馬県では、部局を横断した子どもの貧困対策推進会議と第三者委員会で施策の進捗状況などをチェックしていることを学ぶことができました。
- ・不登校の子どもであっても学歴を積むために復学にチャレンジできる仕組みがあることを学ぶことができました。

(2) 成果

- ・群馬県の子供の貧困についての状況や県の施策を聞いたり、児童養護施設や乳児園、NPO法人など具体的に活動している施設を訪問したりすることができたので、総合的に貧困に関わる課題や解決に向けた取り組みを学ぶことのできる機会を設定することができた。
- ・ホストファミリーの募集を前橋市国際交流協会に依頼したので、参加希望が集まり、スムーズに決定することができた。

(3) 課題

- ・訪問先施設での研修において時間を効率的に使うために、訪問先と質問事項への対応や進行方法、配分時間などを事前に打ち合わせしておくことが必要である。
- ・参加したドイツ団員の食べ物に関するアレルギー情報を共有することができず、食事の直前になって情報を得た。また、その情報を担当者間でも共有できなかった。情報を担当者間で必ず共有することが必要である。

担当 企画指導専門職 横山 直樹

グローバル人材の育成を見据えた国際交流の推進事業

「イングリッシュアドベンチャー」

1. 趣旨

令和2年度の小学校新学習指導要領の本格実施に向け、国立の教育機関として、教育内容の改善と充実を目指し、本事業を実施する。

2. 事業の概要

(1) 期日

令和元年9月7日(土)～8日(日)(1泊2日)

(2) 参加者

①参加対象 小学校5年生

②参加人数 25名 (応募54名 キャンセル3名)

群馬県 前橋市16名、高崎市2名、みどり市1名、富岡市1名、玉村町1名、
吉岡町1名

埼玉県 さいたま市1名、川口市2名

3. 企画運営のポイント

- ・体験活動を中心に据え、積極的に英語を用いてコミュニケーションをとりたいと思う場面を意図的に設定し、楽しみながら英語に親しみ、英語を使ってコミュニケーションをしてみたいと思わせるプログラム構成にする。
- ・野外炊事や自然体験活動に係るプログラムについては、事前に当所職員が外部講師に対して進行方法や安全管理等の事前指導を行う。外部講師は各プログラムの中でパネル等を活用するなど、小学生が英語を使いやすい雰囲気づくりを行う。

4. 日程

	午 前	午 後	夜
9月 7日 (土)	開会式 仲間と英語ではじめまして! 講師: Jaime Ota (ALT) David Carolan (ALT) ・アイスブレイク	英語を使って、食材を探そう ・スカベンジャーハント 英語を使って、カレーを作ろう	英語を使ってキャンプファイヤー ・英語の歌遊び (Hokey Pokey、ロンドン橋落ちたなど) ・スモアづくり
9月 8日 (日)	英語を使って、心と体を動かそう イングリッシュレストラン① ・開店準備 ・リハーサル	英語を使って、心と体を動かそう ・英語を使って買い物 振り返り 閉会式	

5. 主な活動内容



「講師によるインストラクション」



「英語を使って、食材を探そう」



「英語を使ってカレーを作ろう」



「英語を使ってキャンプファイヤー」



「イングリッシュレストラン(準備)」



「イングリッシュレストラン(本番)」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足20名(80%) やや満足5名(20%) やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・初めて参加したけど、ボランティアの人や先生などに気軽に話げできました。そして、友達がたくさんできました。とても楽しかったです。
- ・キャンプファイヤーでは、火の粉が舞っていたけど、踊ったり歌ったりして楽しかったです。
- ・たくさん先生に質問をされたので、たくさん英語を使うことができました。
- ・とても良い経験になったので、これからも英語を学ぼうという気持ちになりました。
- ・いろいろな人とたくさん話すことができたので、仲間づくりができました。
- ・イングリッシュレストランでは、いろいろな人とコミュニケーションをとることができました。

(3) 成果

- ・プログラムに参加して感じたことを答えるアンケートの中で、「たくさん英語を使った」との項目で、「思う」が13名、「やや思う」が6名であった。このことからカレー作りやイングリッシュレストランなどの活動が英語を使う場面として有効であったと言える。
- ・「コミュニケーションができた」「仲間づくりができた」との項目で、それぞれ「思う」が17名、19名であった。このことから、楽しみながら英語に親しみ、英語を使ったコミュニケーションをしてみたいと思わせるプログラムであったと言える。

(4) 課題

- ・キャンセルした3名の参加者の理由に、「友達と一緒に申し込みをしたのに、自分だけ当選した。」という事があったので、参加決定後のキャンセルを少なくするために応募フォームに「1人でも参加」「友達と一緒になら参加」などの項目を設ける必要がある。

担当 企画指導専門職 横山 直樹

「利用団体のための体験活動研修会」

1. 趣旨

国立赤城青少年交流の家を利用する団体の引率者が、実際の活動プログラムや登山を体験することで、施設の利用方法や各プログラムの内容を理解する。

2. 事業の概要

(1) 期日

- 第1回 平成31年4月20日（土）日帰り
- 第2回 令和元年5月11日（土）日帰り
- 第3回 令和元年6月22日（土）日帰り
- 第4回 令和元年7月15日（月）日帰り

(2) 参加者

- ①参加対象 平成31年度利用団体で、活動プログラムの体験を希望する各団体の引率者
- ②参加人数
 - 第1回 25名（11団体）
 - 第2回 10名（4団体）
 - 第3回 30名（11団体）
 - 第4回 4名（4団体）
- ③参加者の内訳
 - 第1回 小学校16名、中学校9名
 - 第2回 小学校8名、中学校2名
 - 第3回 小学校11名、中学校15名、ユースクラブ4名
 - 第4回 小学校1名、中学校3名

3. 企画運営のポイント

- ・各学校独自の下見では実施できない野外炊事を中心にプログラムを構成する。実際に野外炊事を児童・生徒と同じように体験することで、当日安全に活動が進められるようにする。また、選択プログラムとして、実績の多いオリエンテーリングと、教員が実際に指導できるよう「かんな箸作り」や「竹とんぼ作り」を取り入れる。（第1，3回）
- ・実際に登山を児童・生徒と同じように体験することで、登山指導のポイントなどを理解し、当日安全に活動が進められるようにする。（第2，4回）
- ・施設見学では、施設の場所だけではなく、ガイドブックには記載していない情報などを伝える。
- ・参加する各学校に、事前に質問事項を出してもらうことで、当日の質疑応答の時間を有効に使えるようにする。（基本的なことの共通理解を図る）

4. 日程

第1・3回

		午前	午後	夜
第1回	4月20日 (土)	開会行事 施設見学	選択プログラム体験 ・オリエンテーリング	
第3回	6月22日 (土)	施設利用説明 質疑応答 野外炊事体験	・竹とんぼ作り ・かんな箸作り	

第2・4回

		午 前	午 後	夜
第2回	5月11日 (土)	開会行事 施設見学	登山体験 プログラム相談	
第4回	7月15日 (月)	施設利用説明 質疑応答 登山体験		

5. 主な活動内容

第1・3回



「施設見学」



「施設利用説明」



「野外炊事（調理班）」



「野外炊事（かまど班）」



「オリエンテーリング」



「かんな箸作り」

第2・4回



「施設見学」



「施設利用説明」



「登山前（荷物確認）」



「登山（登り）」



「登山（山頂）」



「登山（下り）」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

第1回	満足12名(57%)	やや満足9名(43%)	やや不満0名	不満0名
第2回	満足10名(100%)	やや満足0名	やや不満0名	不満0名
第3回	満足27名(90%)	やや満足3名(10%)	やや不満0名	不満0名
第4回	満足4名(100%)	やや満足0名	やや不満0名	不満0名

(2) 参加者の声

- 第1回
- ・短時間でしたが、大変有意義でした。
 - ・林間学校が楽しみになりました。
 - ・施設見学では、児童が実際に使うところをしっかりと見せてもらえてとても満足です。
 - ・全体がわかりやすい説明でありがたかったです。
 - ・野外炊事では、実際にやってみることができ、指導のポイントがわかりました。
 - ・とても助かりました。今後も継続していただけるとありがたいです。
 - ・実際に体験してみて分かることが多くありました。
 - ・事前にどの場所を知りたいか申込時に書けば、簡単に済む場所が増えるのではないかと思います。
 - ・他校の先生方と同じグループになり、情報交換ができてよかったです。
 - ・休日なので、できるだけ短くできるところは短くしてほしいです。
 - ・少し忙しかったですが、意図がはっきりしていてよかったですと思います。
 - ・オリエンテーション動画が分かりやすかったです。
 - ・もう1週早い時期での研修会でもよかったですかと思えます。
- 第2回
- ・登山の良さを身をもって味わうことができよかったです。
 - ・貴重な体験をすることができました。
 - ・短い時間でしたが、施設の様子がよくわかりました。安心して施設を利用することができます。
 - ・わかりやすく説明して頂きありがとうございました。
 - ・施設見学では、1校に1名のスタッフがついて案内して頂いたのもとても分かりやすく助かりました。
 - ・登山体験では、歩き方や歩行優先方向、危険箇所など、ていねい説明して頂いたのも、登山のポイントがよくわかりました。
 - ・今年から利用することになったので、不安なところもあったのですが、このような研修会を企画して頂きとても助かりました。
 - ・登山では、歩く際の注意を場所ごとにその場で教えて頂きとても分かりやすかったです。子供たちの指導に大変役に立ちます。
 - ・登山途中、体調不良等にも対応して頂きありがとうございました。
 - ・オリエンテーション動画が分かりやすく、ありがたかったです。
- 第3回
- ・大変参考になりました。丁寧に教えていただきありがとうございました。
 - ・施設見学では、わからなかった部分を知ることができ、大変参考になりました。
 - ・詳しくご説明いただきありがとうございました。
 - ・児童と体験する前にカレー作りを練習することができて、とてもよかったです。
 - ・児童に指導し、安全に楽しく体験活動させたいと思います。
 - ・実際に見て、体験して、お話を伺ったことで、不安が減りました。
- 第4回
- ・登り方の注意やアドバイスを頂き、大変参考になりました。
 - ・天候状況が雨・霧等であった為、とてもよいシュミレーションとなりました。

登山前、登山、下山、下山中、下山後と具体的にアドバイスを頂き、大変よい研修となりました。

- ・少人数は残念であったかもしれませんが、質問等しやすい状況であったため、実り多き研修となりました。
- ・今後の参考になりました。とても分かりやすく丁寧にご指導いただき、ありがとうございました。

(3) 成果

- ・参加した先生方に多くの体験をしてもらい、話を聞くだけでは分からないことを実際に体験することで、各プログラムの指導のポイントを理解してもらえることができた。
- ・参加した先生方に登山体験をしてもらい、実際の場所で指導のポイント（危険箇所、休憩場所等）を説明することで、登山活動時の留意点等をしっかりと理解してもらえることができた。
- ・施設見学では、学校数が少ないときは各学校に1人の企画指導専門職が付いて案内し、多いときは3グループに分かれて案内することで、各校のプログラムに沿って施設を回ることができた。また、各校の相談にもものごとくできた。
- ・施設見学では、自主下見では分からないこと（施設の各場所の用途）など、ガイドブックには記載していない情報を参加した先生方に伝えることができた。
- ・施設利用について、動画を活用して全体で一斉に説明することで、参加した先生方の共通理解が図れた。（説明する者が複数になると、微妙に受け取り方が異なる）

(4) 課題

- ・今回初めて実施した事業であったため、休日に行ったが、平日に実施した方がよいという意見も多くあった。次年度は平日や、春休み中の実施も検討していきたい。
- ・アンケートでは、登山体験は全員が休日に実施した方がよいと回答していることから、次年度は所内プログラム体験を平日、登山を休日にすることを検討していきたい。
- ・施設見学の時間が短かった。野外炊事がスムーズに行えることから、施設見学に時間を十分に設定し、野外炊事の時間で調整していきたい。
- ・参加者が定員に満たなかったことから、多くの学校が自主下見を希望していることや登山を実施する学校が減ってきていることが分かった。次年度は参加者が増えるよう、この研修会の利点等を各学校が入所しているときに伝えていきたい。
- ・参加する団体を増やすために、参加団体へ来年度の先行予約の決定通知を送付する時に、案内を明記しておきたい。

第1・2回担当	主任企画指導専門職	梁河 昌彦
第3回担当	企画指導専門職	塩原 基寧
第4回担当	企画指導専門職	横山 直樹

青少年教育指導者等の養成及び資質の向上事業

「ボランティア養成セミナー」

1. 趣旨

ボランティア活動への興味や具体的なイメージをもち、ボランティア活動に参画したいという意識を育て、ボランティア活動を行う上で必要な知識・技能について講義、演習、実習を通して習得する。

2. 事業の概要

(1) 期日 令和元年5月18日(土)～19日(日)(1泊2日)

(2) 参加者

①参加対象 高校生以上

②参加人数 39名(応募45名 キャンセル6名)

③参加者の内訳 大東文化大1名、群馬県立女子大6名、亜細亜大11名、
共愛学園前橋国際大3名、高崎経済大3名、高崎健康福祉大4名、
群馬大7名、社会人4名

④登録者数 38名

3. 企画運営のポイント

- ・ボランティア活動に取り組む上で必要な知識や技能を座学だけではなく、体験を通して学べるようにする。
- ・法人ボランティアとして活動してきた学生ボランティアが、自らの体験談を発表することで、ボランティア活動について具体的なイメージを持たせ、前向きに取り組んでいこうとする態度を養う。

4. 日程

	午前	午後	夜
5月18日 (土)	開会行事 講義「青少年教育施設の現状と運営」 講師：国立赤城青少年交流の家所長 松村 純子	講義・演習「救急救命法と安全管理」 講師：前橋市消防局北消防署白川分署 演習「ボランティア活動の技能」 講師：国立赤城青少年交流の家 職員 横山 直樹 奈良 貢 福岡 公平	
5月19日 (日)	講義「ボランティア活動の意義」 講師：国立赤城青少年交流の家職員 福岡 公平 講義「青少年教育」 講師：群馬県立女子大教授 宮内 洋	説明「青少年教育施設におけるボランティア活動」 講師：国立赤城青少年交流の家 職員 横山 直樹 法人ボランティア 松本 直樹 山本 周吾 岩田 菜緒	

5. 主な活動内容



「青少年教育施設の現状と運営」



「救急救命法と安全管理」



「野外炊事」



「ボランティア活動の意義」



「青少年教育」



「青少年教育施設における
ボランティア活動」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足32名(82%) やや満足6名(15%) やや不満1名(3%) 不満0名

(2) 参加者の声

- ・「青少年教育施設の現状と運営」の講義で、青少年の現状を詳しく知ることができました。また、子ども達のモデルとなるボランティアになりたいと思いました。
- ・「救急救命法と安全管理」の演習で、自分たちが行うべき適切な処理を学びました。
- ・「ボランティア活動の技術(野外炊事)」の実習で、班で協力して団結力が生まれることを体験することができました。また、火の扱いや調理など多くのことに関われました。
- ・「ボランティア活動の意義」の講義で、ボランティアに取り組む姿勢を学びました。また、ボランティアをやってみたいという気持ちが大きくなりました。
- ・「青少年教育施設におけるボランティア活動」の説明で、実際にボランティアに参加した方の体験や感想が聞いて良かったです。また、やってみることが大切だと思いました。
- ・全体を通して良い仲間に出会えました。また、自分の幅が広がりました。ただ、もっと参加者同士で話し合いをする時間があれば良かったと思いました。

(3) 成果

- ・参加者から「青少年の現状を知ることができた。」や「自分たちが行うべき適切な処理を学べた。」などの意見があることから、講義では知識を理解することができ、演習では、体験を通して実感的に理解することができた。
- ・参加者から「実際にボランティアに参加した方の体験や感想が聞いて良かった。」などの意見があることから、先輩ボランティアの発表を聞くことは、ボランティア活動に前向きに取り組もうとする意欲をもつことにつながるということがわかった。

(4) 課題

- ・参加者から「もっと参加者同士で話し合いをする時間があれば良かった。」との意見があることから先輩ボランティアと参加者でグループトークをするなどの時間を設定する必要がある。
- ・参加者から「ちょっと駆け足になって、登録への記入が大変だった。」との意見があることから、登録制度への記入の手順を明確にし、情報を整理し記入できるようにする必要がある。

担当 企画指導専門職 横山 直樹

青少年教育指導者等の養成及び資質の向上事業

「自然体験活動指導者（NEALリーダー）養成事業」

1. 趣旨

ボランティア養成セミナー受講者向けのスキルアップ講習として、楽しく安全に活動を指導するための自然体験活動指導者（NEALリーダー）を養成する。

2. 事業の概要

(1) 期日 令和元年6月29日（土）～6月30日（日）（1泊2日）

(2) 参加者

- ①参加対象 高校生以上
- ②参加人数 19名（男性11名、女性8名：応募21名 キャンセル2名）
- ③参加者の内訳 大東文化大学大学院1名、上越教育大学大学院1名、群馬大学7名、
亜細亜大学4名、高崎健康福祉大学2名、高崎経済大学1名、
青少年教育施設職員3名
- ④修了者数 19名
- ⑤資格取得者数 19名
- ⑥NEALリーダー登録数 13名

3. 企画運営のポイント

- ・ボランティア養成セミナー直後で、ボランティア活動や自然体験活動への活動意欲に溢れている時期に開催することで、参加者の確保を図る。
- ・ボランティア養成セミナーからのスキルアップという位置づけで、指導者として必要な知識や技能を座学だけではなく、実践を通して学べるようにする。
- ・実習や実技において、参加者同士で話し合ったり、関わったりし、交流を深め、相互学習する時間を意図的に設ける。

4. 日程

	午 前	午 後	夜
6月 29日 (土)	開会行事 講義「対象者理解」 講師：国立赤城青少年交流の家 所長 松村純子	講義・実技 「自然体験活動の指導」 講師：大東文化大学教授 中村正雄 講義・実技 「自然体験活動の技術」 講師：国立赤城青少年交流の家 職員 福岡公平	情報交換会
6月 30日 (日)	講義・実技 「自然体験活動の特質」 講師：公益財団法人キープ協会 事業部長 鳥屋尾健	認定試験 閉会行事	

5. 主な活動内容



「対象者理解」



「自然体験活動の指導」



「自然体験活動の技術」



「自然体験活動の特質」



6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足17名(89%) やや満足2名(11%) やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・「対象者理解」の講義で、事前の情報も大切だが、その情報だけにとらわれず、自分の目を通して見たこと、感じたことを実践していきたいと思いました。
- ・「自然体験活動の指導」の講義で、参加者一人ひとりを受け止め、こうするべきだと決めつけないことの大切さを学びました。
- ・「自然体験活動の技術」の講義で、事細かく、安全性について注意することの重要性を強く感じました。また、初めて鉋を使いましたが、危ない物という認識はあったが、安全な扱い方を知ることができ、実際に体験できてよかったです。
- ・「自然体験活動の特質」の講義で、傘アートや料理づくりのアクティビティーは、今後、是非、自分の活動でも取り入れてみたいと思いました。
- ・NEALの研修ではボランティアセミナーと違って、より詳しく自然体験活動の指導者のあり方について学ぶことができました。また、様々な年齢の方と交流し、新たな考え方に触れることができたので、良い刺激となりました。

(3) 成果

- ・6大学16名の学生が参加し、昨年度と比べると、多様な所属からなる参加者が集まった。ボランティア養成セミナー実施後に、そのスキルアップ講習としての位置づけで実施することの成果が得られた。
- ・NEAL演習Ⅱの受講生がスタッフとして携わった。運営スタッフとしての役割だけに留まらず、NEAL有資格者の先輩として、参加者と積極的にコミュニケーションをとり、このことが参加者たちの具体的な指導者像を描くことにつながった。

(4) 課題

- ・昨年度に比べて、参加大学数が多いとはいえ、定員割れとなった。事業そのものの魅力を高め、NEAL資格の必要性を発信し、幅広く参加者を募る方法を検討する必要がある。
- ・NEAL事業については、専門性の高い講師陣を迎える必要があることから、今年度の講師に囚われることなく、講師候補者のリストアップを行い、質の高い事業実施に努める。

担当 事業推進係長 福岡 公平

「教員免許状更新講習（選択領域 18 時間）」

～学級経営に活かす豊かな体験活動～

1. 趣旨

様々な立場の講師からの講義を通して、学習指導要領改訂を踏まえた、最新の教育動向を学びながら、体験活動の重要性を理解するとともに、本所で行われている体験活動プログラムを実際に体験する実習を通して、体験活動の必要性や有用性を実感するとともに、教員としての資質向上を図る。

2. 事業の概要

(1) 期日

第1回 令和元年 7月24日(水)～7月26日(金)(2泊3日)

第2回 令和元年11月23日(土)～11月24日(日)(1泊2日)

(2) 参加者

①参加対象 小・中学校、高等学校の教員

②参加人数

第1回 37名(男性16名、女性21名)

第2回 26名(男性18名、女性8名)

③参加者の内訳

第1回〈校種別〉

小学校 25名 中学校 7名 特別支援学校 1名 その他 4名

〈都道府県別〉

群馬県 24名 栃木県 8名 埼玉県 3名 千葉県 1名

神奈川県 1名

第2回〈校種別〉

小学校 12名 中学校 11名 特別支援学校 2名 その他 1名

〈都道府県別〉

群馬県 16名 栃木県 4名 埼玉県 4名 茨城県 1名

千葉県 1名

3. 企画運営のポイント

- ・防災教育に焦点を当て、「避難所運営ゲーム」や「防災食体験」などを取り入れたプログラムを実施する。
- ・参加した教員が学校・学級ですぐに実践できるプログラムとして、「あかぎアドベンチャープログラム」や「ビジュアルオリエンテーリング」は、実践しながらその効果を体験できるように実施する。

4. 日程

第1回

	午 前	午 後	夜
7月 24日 (水)	講義「学校教育の現状と課題」 講師 群馬県教育委員会 義務教育課長 鈴木佳子	講義・実習 「仲間づくりのレクリエーション」 講師 国立赤城青少年交流の家 主任企画指導専門職 梁河昌彦	情報交換会
7月 25日 (木)	講義「熱中症予防対策講義」 講師 大塚製薬工場 別島徹憲 演習「ビジュアルオリエンテリング」 講師 国立赤城青少年交流の家 所長 松村純子 講義・演習 「防災教育プログラム体験①」 講師 日本防災士会 群馬県支部長 飯塚宗夫	講義・演習 「防災教育プログラム体験②」 講師 日本防災士会 群馬県支部長 飯塚宗夫	講義・実習「野外炊事」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 横山直樹
7月 26日 (金)	講義「学校教育における体験活動の意義」 講師 群馬大学教育臨床心理部門 准教授 岩瀧大樹 実習「クラフト」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 奈良貢	履修認定試験	

第2回

	午 前	午 後	夜
11月 23日 (土)	講義「学校教育の現状と課題」 講師 群馬県教育委員会 義務教育課長 鈴木佳子 演習「ビジュアルオリエンテリング」 講師 国立赤城青少年交流の家 所長 松村純子	講義・演習「防災教育プログラム体験」 講師 日本防災士会 群馬県支部長 飯塚宗夫	講義・実習 「仲間づくりの レクリエーション①」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 横山直樹 情報交換会
11月 24日 (日)	講義・実習「野外炊事」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 横山直樹 講義・実習 「仲間づくりの レクリエーション②」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 横山直樹	実習「クラフト」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 奈良貢 講義「学校教育における 体験活動の意義」 講師 信州大学教育学部 野外コース講師 瀧直也 履修認定試験	

5. 主な活動内容

第1回



「学校教育の現状と課題」



「仲間づくりのレクリエーション」



「熱中症予防対策講義」



「ビジュアルオリエンテリング」



「防災教育プログラム体験」



「野外炊事」

第2回



「学校教育の現状と課題」



「ビジュアルオリエンテリング」



「防災教育プログラム体験」



「仲間づくりのレクリエーション」



「野外炊事」



「学校教育における体験活動の意義」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

第1回 満足37名(100%) やや満足0名 やや不満0名 不満0名

第2回 満足25名(96%) やや満足1名(4%) やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

第1回 ・「学校教育の現状と課題」では、体験活動を授業に取り入れることの意義がよくわかりました。他県ですが、参考になることが多く、勉強になりました。

・「仲間作りのレクリエーション」では、自然に仲良くなれる活動をたくさん教えていただき、すぐに使えると思いました。アイスブレイクからイン

シアティブ、振り返りを自分で体験してその効果を実感することができました。

- ・「熱中症予防対策講義」では、暑さと湿度に慣れるのには1週間程度かかるということや、暑い時期だけではない脱水症状について大変勉強になりました。脱水のメカニズム、対処の仕方について理解が深まりました。
 - ・ビジュアルオリエンテーリングを実際に体験することにより、観察力やコミュニケーション能力の向上につながると実感しました。プログラムの中に俳句作りや自然観察を入れることで、各教科につながられることがよくわかりました。
 - ・「防災教育プログラム体験」では、普段経験することがない避難所の受け入れについて、体験を通して様々な問題点について理解することができました。
 - ・「野外炊事」では、ビニル袋でご飯やオムレツが簡単にできることがわかり驚きました。何でもまずはやってみることが大切だと実感しました。
 - ・「学校教育における体験活動の意義」では、行動を変えてから考えを変える有用性を知ることができました。
 - ・「クラフト」は3日間ともに過ごした仲間と和やかに思い出を語り合いながら作品作りができてよかったです。
- 第2回
- ・「学校教育の現状と課題」では、来年度から本格実施となっていく新学習指導要領の内容について詳しく聞くことができて良かったです。
 - ・ビジュアルオリエンテーリングを実際に体験することにより、観察力やコミュニケーション力、表現力や発見力の向上につながると実感しました。とても簡単にできそうなので、児童会の集会等で活用してみたいと思います。
 - ・「仲間作りのレクリエーション」では、色々なアイスブレイキングを知ることができ、学校でも使ってみようと思いました。協力することで、グループの一体感を生むことができました。
 - ・「防災教育プログラム体験」では、HUGを通して避難所運営の難しさを知るとともに、避難所の役割について知ることができました。
 - ・「野外炊事」では、ビニル袋でご飯やオムレツが簡単にできることがわかり驚きました。非常時に活用できそうだと感じました。
 - ・「クラフト」はとてもゆったり工作したり、交流したりできて良かったです。
 - ・「学校教育における体験活動の意義」では、ただ活動をさせて終わりではなく、ねらいを設定し、振り返らせることで体験から得た学びが大きくなるのだと感じました。

(3) 成果

- ・防災に関する体験活動を中心にプログラムを組むことで、参加者は普段あまり意識していなかった「防災」を意識し、自校の防災計画等に積極的に関わろうとする意欲をもたせることができた。
- ・学校・学級にもちかえってすぐにでも取り組めるプログラムを紹介することで、学んだことを実践しようとする意欲をもたせることができた。

(4) 課題

- ・今後はさらに近県への広報（チラシの送付・持ち込み、HPでの紹介）に力を入れ、より多くの地域の教員に本研修を周知していきたい。
- ・第2回については、始まりと終わりの時間を再度検討していきたい。

第1回担当 主任企画指導専門職 梁河 昌彦
第2回担当 企画指導専門職 奈良 貢

「関東甲信越地区青少年教育施設協議会 第13回職員研修会群馬大会」

1. 趣旨

関東甲信越地区青少年教育施設の運営や課題等について研究協議を行なうとともに、施設職員の資質向上を図る。また、施設間の連携を促進する。

2. 事業の概要

(1) 期日 令和元年11月13日(水)～14日(木)(1泊2日)

(2) 参加者

- ①参加対象 関東甲信越地区青少年教育施設職員及び青少年教育に携わる者
- ②参加人数 <宿泊>42名 <日帰り>21名 <合計>63名(応募総数64名)
- ③参加者内訳 群馬県24名、茨城県7名、埼玉県6名、栃木県5名、千葉県5名、東京都4名、神奈川県4名、長野県4名、山梨県2名、新潟県2名(日帰りも含む)

3. 企画運営のポイント

- ・東京おもちゃ美術館の多田館長による講演「ホスピタリティの力による施設の活性化」では、日本で唯一のおもちゃ総合専門資格「おもちゃコンサルタント」の人材育成や木のおもちゃを子育てに取り入れる「木育」の推進等の施設運営のポイントを学び、青少年教育施設の活性化を目指す。
- ・平成30年度、国立赤城青少年交流の家で実施した3つの教育事業について、各青少年教育施設で活用できる点やポイントを絞り報告書を用いて発表する。
- ・柳澤弁護士による分科会「体験活動の事故事例から学ぼう」では、事故事例とグループ討議を通して、安全な体験活動を目指し、青少年教育施設での管理運営に役立てる。
- ・国立赤城青少年交流の家で実践している幼児の運動遊びについて「室内版」と「ササビー広場版」を体験し、青少年教育施設でのプログラムや幼稚園・保育所を対象とした研修支援に役立てる。
- ・東京おもちゃ美術館「おもちゃこうぼう」「いとこのこや」のワークショップ企画運営をされている貝原講師から、手作りおもちゃ作りについて、実習を通して学び、青少年教育施設でのクラフト等のプログラムに役立てる。

4. 日程

	午前	午後	夜
11月 13日 (水)		開会式 講演「ホスピタリティの力による施設の活性化」 講師：多田千尋氏(東京おもちゃ美術館館長) 事例発表 ①「限界突破キャンプ」田村文明 ②「イングリッシュアドベンチャー」横山直樹 ③「赤城で遊ぼう」福岡公平	情報交換会
11月 14日 (木)	施設見学 分科会 ①「体験活動の事故事例から学ぼう」 講師：柳澤和良氏(弁護士) ②「ササビー広場で遊ぼう」 講師：福岡公平 ③「手作りおもちゃを作ろう」 講師：貝原亜理沙氏 (東京おもちゃ美術館) 閉会式		

5. 主な活動内容



「開会式」



「ホスピタリティの力による施設の活性化」



「赤城の事例発表」



「体験活動の事故事例から学ぼう」



「ササビー広場で遊ぼう」



「手作りおもちゃを作ろう」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果（47名回収）

満足39名（83%） やや満足8名（17%） やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・講演では、ホスピタリティ＝おもてなしが、コミュニケーションの力から生まれるという考え方に感銘を受けました。
- ・事例発表は、事業立案をしていく中で、スタッフ間の情報共有の工夫を参考にさせてもらい改善につなげていきたいと思えます。
- ・「体験活動の事故事例から学ぼう」では、様々な具体的な事例をもとにして、グループで話し合うことにより、学びを深めることができました。
- ・「ササビー広場で遊ぼう」では、幼児の運動の必要性を学び、実際の赤城の取り組みやササビー広場を見ることができて勉強になりました。
- ・「手作りおもちゃを作ろう」では、自施設で、今回のおもちゃ作りのアイデアを取り入れることができないかを考えてみたいです。
- ・いろいろな施設の方との関わりや情報交換できる場があり、とても勉強になりました。

(3) 成果

- ・講演の講師、各プログラムともに参加者からも好評であり、特に、おもちゃ美術館多田館長の講演からは、様々なヒントが得られ、少しでも所の運営に活かしていきたいという意見が多かった。プログラムの内容が良かった。
- ・各分科会の内容は、各青少年施設で実践に活かせるプログラムだった。
- ・赤城職員が一丸となって、全員で準備から当日まで取り組み、50周年記念式典等の運営にも参考となる機会となった。

(4) 課題

- ・事例発表の際、伝え方、見せ方の工夫、事前に複数の目によるチェックが必要である。
- ・全体を見通した早めの準備と広報計画、仕事の分担、割り振りを計画的に行うことが必要である。

担当 企画指導専門職 塩原 基寧

子供の貧困対策事業

「チャンス フォー オール チルドレン 宿泊キャンプ in 赤城」

1. 趣旨

国立青少年教育振興機構の各施設において、経済的に困窮した家庭の子供を対象に、自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。親子のふれあいや交流を深め、自然体験や食育、工作体験などを行うことにより、心身の健康増進や子供の健全育成を図る。

2. 事業の概要

(1) 期日

夏キャンプ 令和元年8月23日(金)～8月24日(土)(1泊2日)

冬キャンプ 令和2年1月25日(土)～1月26日(日)(1泊2日)

(2) 参加者

①参加対象 ひとり親家庭の親と子

②参加人数

夏キャンプ 47名(男子18名、女子29名)

冬キャンプ 19名(男子5名、女子14名)

③参加者の内訳

夏キャンプ 母子家庭16家族 父子家庭2家族

冬キャンプ 母子家庭 9家族

3. 企画運営のポイント

- ・ひとり親家庭の親子を対象に、普段体験できないような活動を中心にプログラムを構成する。
- ・参加者同士やスタッフとの交流を図るためのアイスブレイクを十分に行い、野外でのカレー作りに取り組む。カレーライスのご飯は、いつ・どのような時でも作れることを目標に防災ご飯にする。
- ・親子の絆を深めるために、「子ども体験遊びリンピック」を兼ねた親子でチャレンジゲームを開催する。
- ・保護者を対象に、情報交換会として群馬県生涯学習センター社会教育主事の林先生の講話をもとに、子供への声かけの仕方やバランスのとれた食事について話し合う。
- ・食育として、魚のつかみどりを行い、魚の内臓をとったり、焼いて食べたりする活動や、恵方巻き作りを行う。

4. 日程

夏キャンプ

	午前	午後	夜
8月 23日 (金)	受付 開会式 オリエンテーション アイスブレイク	昼食 カレー&防災ご飯作り	親子チャレンジゲーム 「遊びリンピック」 学習タイム(子) 情報交換会(親)
8月 24日 (土)	朝食 魚のつかみどり体験	昼食(お弁当) 閉会式	

冬キャンプ

	午 前	午 後	夜
1月 25日 (土)	受付 開会式 アイスブレイク 親子チャレンジゲーム 「遊びリンピック」	昼食 乗馬体験・ポニーの引馬 体験	夕食 学習タイム (子) 情報交換会 (親)
1月 26日 (日)	朝食 恵方巻き・豚汁作り	豆まき 表彰式 閉会式	

5. 主な活動内容

夏キャンプ

「アイスブレイク」

「カレー作り」

「防災ご飯作り」

「親子チャレンジゲーム」

「親の情報交換会」

「魚つかみどり体験」

冬キャンプ

「アイスブレイク」

「遊びリンピック」

「乗馬体験」

「学習タイム」

「恵方巻き・豚汁作り」

「豆まき」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

夏キャンプ	満足25名(53%)	やや満足20名(43%)
	やや不満1名(2%)	不満1名(2%)
冬キャンプ	満足16名(84%)	やや満足2名(11%)
	やや不満1名(5%)	不満0名

(2) 参加者の声

- 夏キャンプ
- ・普段家庭ではできないような体験(母親だけだと体験させてあげられないようなこと)をたくさんできてよかったです。
 - ・初対面など、色々な方と遊べたり、話せたりできてよかったです。
 - ・苦手な魚をつかめるようになったなど、子どもの成長を間近で見ることができてよかったです。
- 冬キャンプ
- ・乗馬体験は普段できないことが経験できました。友達と一緒にだったので盛り上がって楽しかったです。
 - ・恵方巻き・豚汁作りは、自分で作ることで食育にもつながり、作る楽しさを体験することができました。
 - ・子供が、自分から進んで親を頼らないで、取り組む姿が見られてよかったです。

(3) 成果

- 夏キャンプ
- ・「カレー作り」「親子チャレンジゲーム」「魚つかみ体験」など、普段できない体験を親子で体験することができたという声が多く、親子の絆を深めることができた。
 - ・職員やボランティア、他の参加者と多く関わることで、人とのつながりの大切さに気付くことができた。
- 冬キャンプ
- ・「遊びリンピック」「乗馬体験」「恵方巻き・豚汁作り」など、普段できない体験を親子で体験することができたという声が多く、親子が交流できる良い場となった。
 - ・職員やボランティア、他の参加者とたくさんの関わりをもつことで、コミュニケーションの大切さに気付くことができた。

(4) 課題

- 夏キャンプ
- ・雨天でテント泊が出来なかった分、時間が空いてしまい、参加者を待たせてしまう時間があった。待っている時の指示や場所の使い方、ボランティアの関わり方を検討していきたい。
 - ・できるだけ多くの参加者に満足してもらえよう、1つ1つのプログラムの内容を十分に検討していく必要があった。今後は事前の打ち合わせを十分に行っていきたい。
- 冬キャンプ
- ・子供たちにとって作ることや食べることなどの楽しい部分だけでなく、準備や片付けの部分もしっかり取り組めるような声かけをしていく必要がある。
 - ・いろいろな参加者にキャンプを経験してもらえるように、参加者募集の仕方の見直しや共催の各市町母子寡婦福祉協議会と連携していく必要がある。

夏キャンプ担当 企画指導専門職 奈良 貢
冬キャンプ担当 企画指導専門職 塩原 基寧

子供の貧困対策事業

「チャンス フォー オール チルドレン 日帰りキャンプ in 赤城」

1. 趣旨

国立青少年教育振興機構の各施設において、経済的に困窮した家庭の子供や児童養護施設の子供たちを対象に、自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。親子のふれあいを深めたり、子供たちと大学生ボランティアの交流を図ったりしながら、自然体験や食育、工作体験などを行い、心身の健康増進や子供の健全育成を図る。

2. 事業の概要

(1) 期日

夏キャンプ	令和元年7月13日(土) 日帰り
児童養護施設	令和元年10月27日(日) 日帰り
冬キャンプ	令和元年12月7日(土) 日帰り

(2) 参加者

①参加対象

夏・冬キャンプ	母子家庭等ひとり親家庭の親子
児童養護施設	児童養護施設希望館八幡の家

②参加人数

夏キャンプ	26名(母親11名 子供15名)
児童養護施設	9名(子供7名 引率者2名)
冬キャンプ	13名(母親6名 子供7名)

3. 企画運営のポイント

- ・ひとり親家庭の親子を対象にうどん打ちやネイチャークラフト、クリスマスリース作りやケーキ作りなどのプログラムを構成する。普段体験できないような活動を親子で行うことを通して、親子の絆を少しでも深められるようにする。
- ・児童養護施設(希望館八幡の家)で生活している子供たちに、子供たちのやってみたくてと思うことを踏まえ、魚の塩焼きや挽き馬体験などの日常生活では体験できないような活動を中心にプログラムを構成する。
- ・このキャンプでは、大学生ボランティアや他の参加者と一緒に活動することで、色々な人とコミュニケーションを図ることができるようにする。

4. 日程(内容)

夏キャンプ

	午前	午後
7月 13日 (土)	受付 はじまりの会・アイスブレイク うどん打ち	ネイチャークラフト 情報交換会(保護者) ふりかえり・おわりの会

児童養護施設

	午前	午後
10月 27日 (日)	受付 開会式・アイスブレイク 魚の塩焼き・ビニルご飯・豚汁作り	ポニーの引馬体験 通常乗馬体験 ふりかえり・閉会式

冬キャンプ

	午 前	午 後
12月 7日 (土)	受付 はじまりの会・アイスブレイク クリスマスリース作り	クリスマスケーキ作り ふりかえり・おわりの会

5. 主な活動内容

夏キャンプ

「うどん打ち」

「ネイチャークラフト」

「情報交換会」

児童養護施設

「魚のつかみ取り」

「豚汁作り」

「ポニーの引き馬体験」

冬キャンプ

「アイスブレイク」

「リース作り」

「ケーキ作り」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

夏キャンプ 満足21名(91%) やや満足1名(4%) やや不満1名(4%)
不満0名
児童養護施設 満足7名(100%) やや満足0名 やや不満0名 不満0名
冬キャンプ 満足11名(85%) やや満足2名(15%) やや不満0名
不満0名

(2) 参加者の声

夏キャンプ ・同じように悩みをかかえているお母さんたちがいることで色々話を
する上で参考になりました。子どもも楽しく過ごせたようで
良かったです。

- ・うどん作り楽しかったです。おいしくてたくさん食べました。情報交換会も勉強になりました。
 - 児童養護施設
 - 【八幡の家の職員】
 - ・子供たちが施設で生活しているときには見せないような真剣な表情で、乗馬や調理をしている姿を見ることができました。
 - ・学生ボランティアと子供たちが非常に楽しく関わる様子が見られてとてもよかったです。
 - 【八幡の家の子供】
 - ・最初は魚を触るのが怖かったけど、最後は触れられるようになってうれしかったです。
 - ・馬の上から見る景色はとても良かったです。普段できない最高の思い出ができました。
 - 冬キャンプ
 - ・家族では中々できない体験がこのキャンプでできて、とてもうれしく思います。
 - ・CACのキャンプが子どもの居場所作りになっていると思います。
- (3) 成果
 - 夏キャンプ
 - ・うどん打ちを親子で一緒に行くことで、親子で楽しめる時間ができた。
 - ・ボランティアの人数が多く、子供たちとたくさん関わりをもつことができた。
 - ・保護者の情報交換会にファシリテーターを置くことで、保護者同士の意見交流が活発になされた。
 - 児童養護施設
 - ・子供たちが新しいことに挑戦することの楽しさを知ることができた。また、いろいろなものを自分の力で作ることを通して、ものづくりの楽しさも知ることができた。
 - ・いろいろなことに挑戦することで、子供たちの「もっとやりたい」という気持ちを引き出すことができた。
 - 冬キャンプ
 - ・クリスマスリース作りやケーキ作りなど協同の体験をすることで、親の絆を深めることができた。
 - ・ボランティアや他の参加者と多くの時間をともにすることで、色々な人とコミュニケーションを図ることができた。
- (4) 課題
 - 夏キャンプ
 - ・ボランティアの打合せが不十分だったので、今後は打合せ時間を確保し、役割を明確化しておく必要がある。
 - 児童養護施設
 - ・今回は児童養護施設で生活している小学生のみの参加であった。また、台風で延期した都合上、宿泊から日帰りにしか日程調整ができなかった。中学生や高校生も一緒に生活しているのだが、学校の部活動やアルバイト等があったため参加できなかった。次回は中学生や高校生や団体の都合など予定を考慮して、日程やプログラムを調整していきたい。
 - 冬キャンプ
 - ・毎回同じメンバーが参加しているので、事業の趣旨を踏まえて、募集の仕方や広報の仕方を考えていきたい。

夏キャンプ担当 企画指導専門職 塩原 基寧
 児童養護施設担当 企画指導専門職 奈良 貢
 冬キャンプ担当 企画指導専門職 奈良 貢

青少年の体験活動等の重要性にかかる普及・啓発事業

「親子キャンプ」

～ササビーと遊ぼう～

1. 趣旨

- ①「冒険と創造の森を活用した運動プログラムの開発委員会」で開発した、「幼児期の遊びを中心とした運動プログラム」を幼児の発達段階に応じ、親子で実施する。
- ②運動遊びを実施することで、幼児期に必要なとされる多様な動きの獲得、体力・運動能力の基礎を培うとともに、全身を動かして遊ぶことの楽しさを感じてもらう。
- ③保護者は幼児教育の重要性を理解する。また、保護者同士で日頃の子育てについて自由に話し合うことを通じて、子育ての悩み等を共有し保護者同士の交流を図る。

2. 事業の概要

(1) 期日 令和元年10月19日(土)～20日(日)(1泊2日)

(2) 参加者

- ①参加対象 幼児(年中、年長を含む)とその保護者 ※兄弟がいる場合も可
- ②参加人数 23名(8家族) (応募総数29名)
群馬県前橋市9名、高崎市9名、館林市3名、東京都台東区2名

3. 企画運営のポイント

- ・「運動遊び」では、興味・関心を持って、繰り返し遊べるよう、段ボールで作成した場や遊具を用いた8つの場を用意する。
- ・「館内フォトラリー」では、館内及び一部周辺を撮影した写真を見て、その写真がマップ上のどこから撮ったものかを推察しながら歩く。
- ・「読み聞かせ体験会」では、講師による親子一斉と親だけの読み聞かせを行うとともに、学生ボランティアによる幼児への読み聞かせを行う。
- ・「幼児期における運動遊びの重要性」では、体力テストの結果を踏まえた子供たちの現状、発達段階の特性、生活習慣の連鎖等について話し合う。
- ・「長七郎山登山」では、親子で一緒に自然を感じながら登る。

4. 日程

	午前	午後	夜
10月 19日 (土)		開会式 運動遊び(雨天プログラム) 館内フォトラリー(雨天プログラム)	「絵本の読み聞かせ体験会」 講師：前橋市読み聞かせグループ連絡協議会(田子智代氏、青柳聡氏) 講義「幼児期における運動遊びの重要性」 講師：国立赤城青少年交流の家 事業推進係長 福岡公平
10月 20日 (日)	長七郎山登山	閉会式	

5. 主な活動内容



「けんけんぱ」



「ワニの川わたり」



「おやつをプレゼント」



「絵本の読み聞かせ」



「ボラによる読み聞かせ」



「長七郎山登山」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足8名(100%) やや満足0名 やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・体育館の中で色々な遊びができ、手作りの段ボールの品もとても良かったです。
- ・とても楽しい読み聞かせでした。幼児期の運動の大切さについて教えていただき、大変参考になりました。
- ・久々に、規則正しい生活ができました。たくさん体を動かし、早寝、早起き、朝ごはんを心がけることができました。
- ・ボランティアスタッフの方にとっても親切にいただきました。子供たちと全力で遊んでくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。
- ・日頃、家庭では体験できないことが体験できたので、これからも参加したいです。

(3) 成果

- ・「運動遊び」では、子供達の運動量や親子で取り組む様子、「館内フォトラリー」では、館内の様子がとてもよく分かるということからプログラムの内容は良かった。
- ・「読み聞かせ体験会」では、あたたかい雰囲気での絵本の内容が良かった。また、親子で分かれて活動を行ったのは良かった。
- ・「長七郎山登山」は、登る距離や高低差から考えても、幼児にとって丁度良かった。

(4) 課題

- ・幼児はキャンセルがあるため、広報手段のさらなる工夫をして、参加者を増やすようにする。
- ・雨天プログラムは全員で楽しめるものなどを開発した方が良い。
- ・食事の際に使う幼児用のイスや食堂レーンの高さなど、幼児用の設備・準備の充実を図る必要がある。

担当 企画指導専門職 田村 文明

青少年の体験活動等の重要性にかかる普及・啓発事業〈民間企業等連携事業〉
「育パパ&育ママ応援ファミリーキャンプ2019」

1. 趣旨

当機構は、体験活動を通じた青少年の自立を目指し、幼児期からの体験活動や基本的な生活習慣の育成について推進するとともに体験の場と機会のさらなる充実について取り組んでいるところである。本事業は、その具体的な事業の一つとして、民間企業等との連携による教育事業等の質的・量的な拡充を図るため、民間企業との共催事業を実施し、民間企業と連携したモデルプログラムを構築する。

2. 事業の概要

(1) 期日

秋キャンプ 令和元年10月 5日(土)～6日(日) (1泊2日)
冬キャンプ 令和2年 2月 1日(土)～2日(日) (1泊2日)

(2) 参加者

①参加対象 幼児・小学生を含む家族・親子

②参加人数

秋キャンプ 36名(14家族) 保護者18名 小学生13名 幼児5名
冬キャンプ 53名(18家族) 保護者24名 小学生14名
幼児12名 3歳未満児3名

③参加者の内訳

秋キャンプ 東京都5家族、千葉県4家族、埼玉県3家族、神奈川県2家族
冬キャンプ 東京都9家族、千葉県8家族、埼玉県1家族

3. 企画運営のポイント

- ・民間企業と連携したモデルプログラムを構築すべく、東武鉄道及び東武トップツアーズと連携し、首都圏の家族をターゲットにした集団宿泊体験や自然体験を提供する。
- ・「長七郎山ハイキング」、「森の散策」を通して、赤城山の大自然の中で、秋の自然を満喫する機会と場を提供する。
- ・「パパ・ママ向け講座」では、体験活動や規則正しい生活習慣の大切さなどを保護者向け伝えるとともに、パパ・ママの交流を図る場とする。
- ・「絵本の読み聞かせ」では、学生ボランティアによるパジャマへの着替えや歯磨き指導の後、読み聞かせ等を行う。
- ・地元の近隣施設の連携強化も踏まえ、「さつまいも掘り」体験を実施し、赤城周辺の魅力を参加者に伝える。
- ・冬の赤城山の自然を満喫する「雪遊び」と季節の行事である「恵方巻づくり」を実施することで、家族が楽しむ自然体験や文化体験の機会と場を提供する。

4. 日程

秋キャンプ

	午 前	午 後	夜
10月 5日 (土)	浅草駅発ー(特急りょうもう号) 赤城駅着	はじまりの会 長七郎山ハイキング ぐんまちゃんと写真撮影 ミニキャンプファイヤー	パパママ向け講座 絵本の読み聞かせ
10月 6日 (日)	森の散策 おわりの会 さつまいも掘り	赤城駅ー(特急りょうもう号) 浅草駅着	

冬キャンプ

	午 前	午 後	夜
2月 1日 (土)	浅草駅発ー(特急りょうもう号) 赤城駅着	雪遊び はじまりの会	ミニキャンドルファイヤー パパママ向け講座 絵本の読み聞かせ
2月 2日 (日)	恵方巻づくり ぐんまちゃんと写真撮影 おわりの会	赤城駅ー(特急りょうもう号) 浅草駅着	

5. 主な活動内容

秋キャンプ



「長七郎山ハイキング」



「長七郎山ハイキング」



「パパママ向け講座」



「読み聞かせ」



「森の散策」



「さつまいも掘り」

冬キャンプ



「雪遊び」



「雪遊び」



「パパママ向け講座」



「絵本の読み聞かせ」



「恵方巻づくり」



「恵方巻づくり」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

秋キャンプ	満足	11家族 (79%)	やや満足	3家族 (21%)
	やや不満	0家族	不満	0家族
冬キャンプ	満足	15家族 (83%)	やや満足	2家族 (11%)
	やや不満	1家族 (6%)	不満	0家族

(2) 参加者の声

- 秋キャンプ
- ・普段できない体験ができ、気の合う友達も作れてよかったです。
 - ・子供とゆっくり向き合える時間が持てました。これからも、子供とゆっくりと過ごせるプログラムに期待します。
 - ・ハイキング、さつまいも堀りなど、秋を満喫でき、大満足です。
 - ・多くの施設に行きましたが、ボランティアの方が食事を同じテーブルで食べてくれたのは初めてでした。ボランティアの方が根気よく、子供の相手をしてくださり、助かりました。
- 冬キャンプ
- ・プログラム時間がちょうどよく、とても満足です。小さな子供が多かったので、内容や時間が子供たちにとっても合っていました。
 - ・日ごろ、子供3人を1人で見届けることが大変なので、職員やボランティアさんのおかげで、スムーズに動けました。
 - ・電車やバスの座席にゆとりがあって良かったです。
 - ・秋に比べると、各プログラムの時間が少なく、残念でした。

(3) 成果

- 秋キャンプ
- ・キャンプに参加しようと思ったきっかけが一番多かったのは、「プログラムに魅力を感じたから」であることから、プログラムの企画は良かった。
 - ・交流の家のプログラムだけではなく、近隣施設と連携し体験活

動プログラムを提供した。このことにより、都内に住む家族にとっては、赤城の自然や観光施設を満喫する内容となったと思われる。

- 冬キャンプ
- ・ボランティアが、活動プログラム中はもちろん、食事中も含めて、家族と一緒に過ごしながら、子供の面倒など、細かい点に気を配って動いてくれたことで、参加者から感謝のお言葉をたくさんいただいた。
- ・広報を早めに実施できたことから、秋編を上回る19家族57名の申し込みがあった。駅構内掲示のチラシ、電車内の中張り広告、学校配布のチラシ、前回参加者など、多様な広報媒体から情報を入手して参加していることから、民間企業連携事業の意義を実感することができた。
- ・雪不足のため、予定を変更し、赤城山第一スキー場で雪遊びを実施した。交流の家からバスで40分程度の距離で、雪遊びプログラムを十分に実施可能な場を見いだすことができ、今後の、冬の活動展開が広がった。また、参加者の雪遊びの満足度が高かったことから、首都圏に住む家族にとっては、赤城の冬の自然を満喫する内容となった。
- ・民間企業との連携2年目、また、今年度は、秋編に続いて2回目の実施であったことから、連携企業との連絡調整がスムーズとなり、事前準備等、運営が円滑にすすんだ。

(4) 課題

- 秋キャンプ
- ・民間企業との連携事業2年目となり、昨年度に比べるとスムーズな運営となってきたが、参加者の把握、参加者への連絡、体験プログラム提供機関への連絡等、さらに細部にわたって、丁寧に取り組む必要がある。
- ・プログラムに企画にあたって、自然体験活動に関するニーズ及び子供同士が仲良くなることの要望も見受けられてことから、内容の充実を図る必要がある。
- 冬キャンプ
- ・雪遊びプログラムを実施するにあたり、物品の精査や、活動場所の詳細な把握、安全管理の徹底など、入念な準備を職員だけでなくボランティアスタッフとも共有する必要がある。
- ・幼児や未満児が多く参加する事業であることから、特に、各プログラムの時間配分や全体の流れについて、再検討する必要がある。

担当 事業推進係長 福岡 公平

赤城フェスタ2019

1. 趣旨

群馬県では多くの自然体験が行われている。環境教育を始め、観光、野外教育、アウトドアスポーツ、子育て支援、福祉、医療など、その目的や使われ方は様々である。そのような環境の中、「自然体験活動」に興味のある親子を対象に様々な活動を体験することをおして、自然体験への興味関心をさらに高められるようにする。

2. 事業の概要

(1) 期日 令和元年11月3日(日)～11月4日(月・祝)(1泊2日)

(2) 参加者

①参加対象 幼児・小学生を含む家族・親子

②参加人数 宿泊70名(22家族)、日帰り152名

③宿泊者の内訳 22家族

保護者29名、小学生30名、幼児10名、3歳未満児1名

群馬県16家族、東京都4家族、埼玉県1家族、茨城県1家族

3. 企画運営のポイント

- ・群馬県から「体験の風をおこそう」運動実行委員会主催事業として、赤城青少年交流の家が実施主体となりながら、実行委員会構成団体と連携して実施する事業として位置づける。
- ・家族、特に子供たちに、多様な遊び、体験の機会と場を提供するとともに、家族でゆっくりと楽しい時間を過ごす1泊2日の宿泊を伴う事業とする。
- ・「体験の風をおこそう」運動応援団の生山ヒジキさんを招聘し、縄跳びパフォーマンスや縄跳び教室を実施する。
- ・法人ボランティアが自主企画し運営するブースを設ける。これまで培った知識・技能・経験を活かして、参加者が楽しめる企画を話し合い、運営することを通して、赤城ボランティアとして意識向上を図るとともに、より実践的な力を養う機会とする。

4. 日程

	午 前	午 後	夜
11月 3日 (日)		開会式 夕食	生山ヒジキさんのなわ とびパフォーマンス 運動遊び 入浴 就寝
11月 4日 (月)	朝のつどい 朝食 オープニング 体験活動(午前の部) なわとび教室(午前の部)	体験活動(午後の部) なわとび教室(午後の部) クロージング	

5. 主な活動内容



「なわとびパフォーマンス」



「オープニング」



「なわとび教室」



「ボランティア運営ブース」



「連携機関運営ブース」



「クロージング」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足 15 家族 (79%) やや満足 4 家族 (21%) やや不満 0 家族 不満 0 家族

(2) 参加者の声

- ・職員の方、ボランティアの方、皆の親身な対応が嬉しく、気持ち良いときを過ごせました。食事も美味しかったです。
- ・乳児がおり、色々と便宜を図っていただきありがとうございました。6歳の娘も満足していたようです。またの機会を楽しみにしています。
- ・普段できないことを体験できて良かったです。また宿泊から参加したいです。
- ・生山さんのなわとびパフォーマンスが素晴らしかったです。普段見られないすご技が見られて大興奮で、子供達のなわとび熱が高まったようです。

(3) 成果

- ・赤城青少年交流の家が実施主体となりながら、実行委員会構成団体である県立妙義少年自然の家、県立東毛少年自然の家、県立北毛少年自然の家、日本ボーイスカウト群馬県連盟の4機関がブース出展に協力したり、食堂が屋台ブースを出店するなど、様々な機関で連携して取り組むことができた。
- ・生山ヒジキさんのパフォーマンスやなわとび教室に興味があり参加した家族が多かったことから、応援団の招聘が集客に大きな効果があった。また、参加者の感想からも、絶賛の声が多く聞かれた。

(4) 課題

- ・広報開始が遅れたことから、参加者、特に宿泊参加者が少なかった。事業企画のスタートを早めるとともに、効果的な広報先・広報媒体を検討する。
- ・風が強く、各ブースに設置した簡易テントの多くが破損した。安全な事業運営の観点からも、実施時期や開催場所を見直すとともに、より強固なテントを購入し使用することを検討する。

担当 事業推進係長 福岡 公平

地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

「群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動推進委員会出展ブース」

1. 趣旨

群馬県における子供たちの体験活動を推進するとともに、「体験の風をおこそう」運動を広く普及することを目的として、群馬県教育委員会及び学校教育関係者並びに青少年団体による実行委員会を組織し、実行委員の団体及び関係する団体と連携しながらブース出展し、体験活動の場を提供する。

2. 事業の概要（期日と参加者）

	参加事業名	期日	参加人数	会場
1	のびゆく子どものつどい	5月19日(日)	384	富士見公民館
2	電力中央研究所 赤城試験センター研究所公開	5月25日(土)	393	電力中央研究所 赤城試験センター
3	ぐんま山フェス	6月 8日(土) ～6月 9日(日)	945	群馬県庁
4	ぐんだいで遊ぼう！	7月28日(日)	160	群馬大学理工学部
5	第15回群馬ちびっ子大学	8月10日(土) ～8月13日(火)	3,995	ヤマダ電機 LABI 高崎
6	前橋市生涯学習 フェスティバル 2019	8月24日(土) ～8月25日(日)	539	前橋プラザ元気 21 生涯学習センター
7	ホリデーイン前橋	8月25日(日)	1,093	敷島公園
8	ケヤキ並木ストリートフェス	9月 8日(日)	941	前橋駅前
9	子どもゆめ基金説明会	9月14日(土)	23	水戸生涯学習センター
10	アウトドアゲーム体験会	11月 2日(土)	164	いせさき市民のもり公園
11	総社秋元公歴史まつり	11月10日(日)	768	総社公民館
12	第10回おおた・まちの先生 見本市	11月24日(日)	392	太田市立鳥之郷小学校
13	まえばし初市まつり	1月 9日(木)	387	前橋プラザ元気 21
	合 計		10,184	

国立赤城青少年交流の家の出前事業

	参加事業名	期日	参加人数	会場
1	和のコト Asobi ～前橋レトロトリップ～	5月25日(土) ～5月26日(日)	540	臨江閣

2	AKAGI PIG-OUT CAMP 2019	5月25日(土) ～5月26日(日)	291	みやぎ千本桜の森公園
3	赤城ふれあいの森まつり	7月27日(土)	169	SUBARU ふれあいの森赤城
	合計		1,000	

3. 企画運営のポイント

- ・県内の様々な施設で開催されるイベントにブース出展を行い、缶バッジ作りやかんな箸作りなどの手軽にできる体験活動を多くの子供たちに提供する。
- ・本所を会場として「赤城フェスタ2019」を宿泊で開催し、群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動実行委員と連携して、近隣地域の幼児・小学生の親子を中心に様々な体験活動を提供するとともに、「体験の風をおこそう」運動の推進を図る。

4. 事業の様子



「ぐんま山フェス」



「ぐんだいで遊ぼう！」



「群馬ちびっ子大学」



「ホリデーイン前橋」



「生涯学習フェスティバル」



「総社秋元公歴史まつり」

5. 成果と課題

(1) 成果

- ・幼児・小学生だけでなく親子で様々な体験活動に参加できる機会と場を提供することができた。また、保護者には、体験活動の意義や魅力を発信することができた。

(2) 課題

- ・連携施設と行事等が重ならないように、早めに日程調整を行う。
- ・県内の大型ショッピングモール等で、「体験の風をおこそう」フェスティバルを開催し、近隣地域の子供たちに広く体験活動の場を提供していきたい。

担当 事業推進係長 福岡 公平

令和元年度 国立赤城青少年交流の家職員

所	長	松村	純子
次	長	鈴木	昭博
主任企画指導専門職		梁河	昌彦
企画指導専門職		横山	直樹
企画指導専門職		田村	文明
企画指導専門職		塩原	基寧
企画指導専門職		奈良	貢
事業推進係長		福岡	公平
事業推進係		山川	晃
事業推進係		山下	順子
事業推進係		大工原	仁志
事業推進係		吉田	賢
事業推進係		阿佐美	幸子
事業推進係		小林	恵
総務係長		吉田	真祐
総務係		鈴木	和子
総務係		戸田	みどり
管理係長		齊藤	勇一
管理係		岡	一成
管理係		佐藤	順彦
管理係		寺田	里美

令和元年度 国立赤城青少年交流の家事業報告書

令和2年3月

編集・発行 独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立赤城青少年交流の家

〒371-0101 群馬県前橋市富士見町赤城山 27

TEL 027-289-7224 FAX 027-289-7226

URL <https://akagi.niye.go.jp/>

E-mail akagi@niye.go.jp